

「日本語学科」での教育経験と 研究者としての学び

笹沼俊暁

1. 私は教師か、研究者か？

私は日本語教育の専門家ではない。台湾の大学の「日本語学科」で教師を二十年来の職業としているが、一度たりとも自信をもって学生に接したことがない。着任以前は日本語教育についてなんら専門的訓練を受けたことがなく、授業経験もなかった。2000年代の台湾における大学拡張期にあつて、日本文学の研究で博士号をとった日本語ネイティブ、というだけの資格で、日本語教育に人生を賭けてきた同僚達と同じ釜の飯を食う機会にありついた。現在であれば、私が日本語学科の新任教員になることは困難だろう。

とはいえ日本語学科は狭義の日本語科目だけでできているわけでないし、さすがに二十年も教師を続けていれば、授業の進め方や学生への接し方等について、職業的な経験則らしきものも出来はするし、この仕事に充実感を感じていないわけでもない。だが、べつに自分が教師として大きく成長したとは思わない。自分には他人を教え導く資格がある、と思ひ込む教師の職業病と、自分がまったく無縁だという勇氣はないが、それでも私の内在的なアイデンティティーは文学研究と批評のほうにある。本や資料を読んで文章を書くという点で、日常的にやっていることも大学院生とたいして変わらない。

教育や学生がどうのこうのと意見を述べることに、私は羞恥心をいだく。だが、本号の特集テーマは「誰と学ぶか」である。これまで多くの人々が漠然と想定してきた、教室という空間の中で、教師が教え、学生が学ぶ、という枠組そのものを再考しようという趣旨である。そこには、教師自身の学びと自己懷疑をめぐる問題意識が入り込む余地がある。であるならば、私はここで、台湾の日本語学科という空間における、日本語ネイティブの人文系研究者にとっての「学び」について書いてみようと思う。「日本語教師」としての

成長の話はさておき、日本語教育の職業環境が人文諸学の研究・批評にどのような刺激をあたえるか、という問題を考えたいのである。

ただし本稿は、私の個人的な主観と回想、狭い見聞の範囲にもとづくエッセイのようなものであって、学術的な方法論にもとづいてはいない。また私は、「日本語学科」という呼び方に対して、長い間強い違和感を抱いて来た。そしてそもそも私の勤務する学科は正式名を「日本語言文化学系」と呼称し、狭義の日本語学習だけでないことを特色として強調している。しかしそれでも、日本語が核心的な位置にあることに変わりはなく、「日本語学科」という日本語の略称は教員・学生間で日常的に使用されている。個人的に違和感はあるが、現実存在する雰囲気表現するため、本稿ではこの呼び方をあえて採用した。

2. 日本語教育経験のないネイティブ教師の戸惑い

一口に日本語教師といっても、日本語学科という空間にはいくつかの異なるタイプの教員が在籍している。たとえば、中国語や台湾語等を第一言語とする教員と、日本語ネイティブ教員がいる。両者の間には、学生時代における日本語教育の当事者としての経験の有無など、多くの差異がある。しかしそれに比べると、日本語教育を専門とする教師達と、日本文学や日本歴史などその他の領域にバックボーンをもつ、私のようなもの達の相違は、日本語教育学において案外見過ごされがちな問題なのかもしれない。

同じ職場にしながら、両者が見ている風景は必ずしも同じでない。なぜなら、日本語教育を専攻する大学教員の多くにとって、研究活動と授業は密接に繋がっているのに対し、そうでない者の研究活動は、日本語教育と基本的に別物だからである。日本語教育学者にとって、日々の教育活動は学術研究の原点であり、逆に研究成果をもとに授業実践をおこなうことも多いだろう。だが、そうでない教員は、日常の授業とはかけ離れたところで研究活動をおこなう。

むろん、日本語学科のカリキュラムには文学や歴史などの科目も設置されており、そこでの教育実践をもとに、台湾人学生を対象とした日本文学や歴史の授業法についての文章や論文を執筆する教師もいる。しかし、その多くはなんらかの特集や依頼に応じるなどした単発的なものであり、その人の研究活動にとっての基幹部分を構成するわけではない。

1990年代末から2000年代にかけて、日本で大学院拡張政策がすすめられた結果、若手研究者の就職難が深刻化した。そのため当時、日本文学や日本歴史、日本民俗学等を専攻する若手研究者の少なからずが、当時大学拡張期にあった台湾へ、緊急避難的に職を求めることになった。いまでこそ、私の身の回りでは、中国語に堪能で日本語教育経験も豊富な若手教員が増えているが、当時、台湾へやってきた新人日本籍教員の多くは日本語教育の経験や知識をもたず、中国語運用能力もほぼ無かった。私自身がその一人であったのだが、こうした「研究難民」にとって、台湾での日本語教育体験は何だったのか、また彼らの存在は台湾の日本語教育に何をもたらしたのか。この問題は、そろそろ検証対象とされてよい頃合いのように思われる。

台湾の日本語学科に着任した、人文系諸学を専攻する日本語ネイティブ教師は、それまで経験のなかった日本語教育の具体的なスキルを、新たに学ばなければならない。中国語による授業遂行能力がないため、多くは中級以上の作文や会話といった、ネイティブとしての強みを活かせる科目を担当する。だが、「親日的」と称される台湾で、日本人というだけでチャホヤされる傾向もあるとはいえ、新人ネイティブ教師は、日本語教育の知識経験不足のため学生の不満や失望を引き起こしやすい。専門スキルをもつ同僚と比較されてしまい、「私はもともと〇〇の研究者なのだ」という意識に苦しめられることもある。日本語科目のみならず、文学や歴史等の専門的な科目においても、台湾人学生の日本語レベルや興味関心、社会文化背景に合わせた授業スタイルを確立させるには、それなりの試行錯誤を必要とするのである。

そのほか私の経験をいうと、自身が学生時代に体験したかつての日本の大学と、台湾の日本語学科の雰囲気ギャップに違和感を抱いたことを憶えている。一定以上の世代なら、教養主義と学生運動の余波が残り、かつバブル時代にはレジャーランドと揶揄された、かつての日本の大学に見られた相当に「自由」で「いい加減」な雰囲気を記憶しているだろう。真面目に授業に出て成績表に「A」を並べることよりも、サークル活動やアルバイト、コンパ、恋愛と交友、旅行、読書、映画鑑賞、議論等に耽溺するような、学生時代にしかできない自由で主体的な体験にこそ多くの「学び」がある、という価値観である。教師は教師で、自身の学術研究のため頻繁に休講をし、誰もそれを咎めないばかりか、浮世離れ

した学究として肯定的に見られることすらある。(もっとも今では、日本の大学でそのような雰囲気は、とうの昔にほとんど絶滅しているようではあるが。)

それに比べると、台湾の日本語学科では、必修科目が多くて出席も厳しく、テストの点数にこだわる学生も多い。また、ディベート大会や演劇公演、国際交流などの課外活動では、教師に指導的役割が求められる傾向が強い。いい意味でも悪い意味でも、教師と学科の主導に多くが要求される。「学生の主体性をはぐくむ」という主旨の活動が、教師と学科によるセッティングで行われたりもする。さらに日本語学科という空間はその成り立ちからして、学術研究よりも教育活動が重視される傾向が構造的に強い。大学ランキングや助成金に影響するので、大学側は教員達に研究業績を求めるが、現場では教育が優先されざるをえない。そして日本語学科という空間では、大学は学術の場であり、教員は日本語教師である以前に人文諸学問の研究者である、という認識を明確にもつ学生は多くない。博士課程で研究者として訓練を積んできた教師は、「研究」の観念が希薄な雰囲気の中で、時に複雑な気持ちになるのである。

だが、そうした環境だからこそ、それまで当たり前の存在だと思っていた、研究や学術論文の制度性と枠組について考え直し、相対化することもできるはずである。こうした「学び」が、文学や歴史等の研究そのものにポジティブな影響をあたえる可能性はじゅうぶんにあると考えられる。

3. 日本語学科ならではの、研究者としての学び

社会や言語、文化背景の異なる異国の学生達を相手にする経験は、たとえ目に見える形で論文の中から明確にそう読み取れないとしても、研究者になんらかの変化を及ぼす。

たとえば、台湾の日本語学科に勤務する日本文学研究者は、授業で日本文学の作品を講読するなかで、教養背景を異にする台湾人学生からの、思いもよらない反応に接することがあるだろう。日本語学科での授業活動がきっかけとなって、それまでとは違う角度からテキストを読み直すようになる文学研究者は少なくないと思われる。また、台湾では幼少期から日本の現代大衆文化に親しみ、そこから日本語学科に進む学生が多い。そのなかで授業や論文指導を進めるうちに、現代サブカルチャー研究へと本格的に転じる日本文学研

究者もいる。台湾あるいは中国語圏における現代日本文化の受容状況を日常的に目にする
ことで、それまで日本の枠内で思考していた物事を、別の角度から見るようになる。

だがとくに多いのは、日本統治時代台湾の歴史や文化、文学、言語に関心をいただくケー
スである。1990年代以降の日本の学術界では、ポストコロニアル理論や国民国家論、カル
チュラルスタディーズの観点が多くの領域で採り入れられた。そうした中で大学院生活をお
くった人文系研究者の少なからずが、台湾の大学に赴任してから、台湾各地に残る日本
統治時代の遺構や、老人たちの話す流暢な日本語に接し、徐々に自身の研究テーマに採り
入れるようになる。

こうした流れは、台湾の民主化と本土化が進む中で、日本語学科所属の多くの台湾人研
究者が向かった研究動向と一致するものだった。「伝統的」な日本文学の研究題材のみでは
なく、日本統治期台湾と関係する日本語作品や作家が研究されるようになったのである。
この変化は、研究領域内部にとどまらず、教育内容にも影響を及ぼさずにいられない。そ
して、台湾に新しく赴任した日本籍の日本文学研究者のうち少なからずが、これに刺激を
うけた。

そして、研究題材だけでなく、言語にかかわる刺激もある。異国の地での言語教育経験
は、研究遂行のための媒介言語に、なんらかの変質をもたらすことがあるのである。私の
個人的な体験を述べると、台湾で日本語教育にたずさわるようになってからしばらくして、
日本に帰省したさい、友人に「話し方が前と違う」と言われたことがある。また別の友人
には、「文章の書き方が変わった。文体が締まってきた」と言われた。それまで自身の手足
を動かすように、意識せずダラダラと話したり書いたりしてきた私の日本語に、知らない
うちに変化が生じたらしいのだ。どこがどう変わったのか、自分で具体的に説明すること
は難しい。だが、台湾人学生相手に、なるだけわかりやすい表現を心がける日々を送るこ
とで、私の日本語から日本語特有の語感やニュアンス、コンテキストに頼った表現が、以
前に比べて減少した可能性がある。

これが文章としてよい変化なのかどうかは、見方によって変わるだろうが、私自身は肯
定的に感じている。そしてここには、中国語学習をはじめたことも、大きく関係している
と思われる。外国人学生に日本語を教え、同時に見知らぬ異言語を新しく学ぶという過程

のなかで、それまで空気のような母語から我が身を引き剥がし、距離を取る習慣が芽生えた可能性がある。これにより、それまでたんに知識的・理念的に理解していた、日本統治時代台湾人日本語作家の気持ちや感触を、少しでも体感的に想像する余地も生まれるのである。

台湾在住の日本籍研究者の中には、台湾での異言語体験を、自身の研究により明確に反映させる例もある。たとえば私の知るある古典研究者は、多言語社会である台湾での生活体験を、中世日本における五山文学の研究に昇華させた。通常の日本漢詩文研究では、文字として表現されたもののみが考察対象となり、音声に着目されることは少ない。しかし彼は、中世日本の禅寺には、大陸各地からやってきた僧侶が使用する、多様な口語の音声に満ちていたと指摘し、そこから禅僧にとっての漢詩文が何だったかを東アジア規模で再考察したのである。これは、台湾での異言語体験を背景に生まれた、ユニークな日本古典文学研究の成果だといえよう。

4. 日本語学科における学問の矛盾と課題

これまで、日本語学科のネイティブ教師達は、台湾での教職経験を糧として、文学、歴史、民俗学などそれぞれの学問領域において研究成果をあげてきた。とはいえそこには構造的な問題もある。ここで、私自身が日本語学科で教育・研究活動に携わる中で感じてきた学術・思想上の矛盾と課題について述べてみたい。

一つは、日台間に横たわる思想文脈の相違に対しどのように向き合うべきか、という課題である。日本統治期の台湾では、支配者である日本人側と被支配者の台湾人側は、たとえ表面上和気藹々とつき合ったとしても、両者は依然として「同床異夢」の関係にあったといわれる。現代の日台間には、かつてのような支配・被支配の関係はもうないが、しかし別種の矛盾や齟齬が厳然と存在している。たとえば、ポストコロニアル的題材に関する研究に携わる研究者のうち、台湾側と日本側の間には、しばしば前提とする問題意識とその歴史文脈に大きな隔たりがある。

なぜなら、台湾側の多くは「いかにして台湾に独自のナショナリティと主体性を立ち上げるか」という動機から日本統治時代に関心を抱くのに対し、一方で日本の学術界に多い

リベラル派はむしろ、「近代日本のナショナリズムとその延長としての植民地主義をいかに自己反省し、相対化するか」という問題意識から出発する傾向があるからである。国家とナショナリズムをめぐる向き合い方の相違は、現代日本の自民党政権や、沖縄米軍基地問題、日本国憲法第九条、「台湾有事」問題等に対する認識と評価の食い違いにも影響してくる。

実のところ、私自身がこの問題を強く意識するに至ったのは、研究者同士でのやりとりというより、むしろ日本語学科の台湾人学生とのコミュニケーションによるところが大きい。私だけでなく、在日日本籍教師の多くがこの問題の存在を、学生との対話を通し、多かれ少なかれ意識してはいると考えられる。これもまた一つの「学び」ではあるが、この矛盾が目に見える形で議論の題材とされることは少ない。今日の台湾では、「台日友好」の社会風潮の中、各地の日本語学科でさまざまな日台交流イベントや学術会議のたぐいが開催され、活況を呈しているものの、多くの場合、日台間の思想的矛盾に蓋がされたままになっているのでないだろうか。

むしろこれは、文学や歴史のネイティブ教師のみが負うべき問題ではない。今後、日台間関係をめぐる「知」の最前線であるべき日本語学科にあっては、文学、歴史、民俗学、言語学、言語教育などの分野を問わず、日台の教員と学生が、双方の間に横たわる相違と矛盾の存在そのものを認識し、批判的考察を学問言説のレベルにまで昇華してゆく必要があるように思われる。

もう一つは、言語をめぐる日台の非対称性の問題である。上に述べたように、台湾の日本語学科で教鞭を執る日本文学や日本史等のネイティブ教師の中には、現代台湾に遺された植民地時代の痕跡に関心を抱き、当時の日本語資料を題材とした研究テーマに向かう者が少なくない。だが、そこでしばしば陥りがちな落とし穴は、ややもすると「日本」と「日本語」にかかわる部分にのみ意識を引き寄せられてしまう点である。

いうまでもなく、日本文化や日本語に関連する要素のみが台湾の歴史と文化の本質を形作っているわけではない。その点を頭では理解していても、日本文学や日本史等を専攻する人間は、どうしても日本要素を軸にアプローチする方向に走りがちである。中国語や台湾語等の言語能力の不足が、こうした傾向を後押しする。

日本語ネイティブ教師達は、日本語学科という「日本語の租界」の中で守られ、日本語を運用することを職業上の任務としているうち、その中で生活と意識が完結するようになる。中国語や台湾語を勉強しなければ、という気持ちはあっても、周囲の台湾籍同僚や学生の流暢な日本語の前で、意志がくじけてしまう。やがて多忙な毎日のなかで、台湾人側の日本語に頼ることに慣れ切ったまま歳月が過ぎていく。

これは、台湾史や台湾文学、中国語学等を専攻し、もともと一定以上の語学能力を身に着けていた者は別として、それ以外の分野で学位をとってから台湾の日本語学科に赴任するネイティブ教師の多くが経験する問題である。だが、日本語教育の実践現場では、「ネイティブ教師はその国や土地の言葉を学び、使用するべきか」という問題は、学生の日本語習得のためにどれほど有効か、という枠内でのみ意識される傾向があり、その思想的、倫理的な意味が深く考慮されることは少ないように思われる。(無論、現代の言語教育学では、言語帝国主義やネイティブスピーカー特権、教師と学生の権力非対称性等の問題について、理論的議論がさまざまになされているのであろうが。)

もう少し話を進めると、ここには、日本語学や日本文学、日本史等の分野では日本語を使用して学術研究をおこなうことを当然とみなす、台湾の学術界に広く見られる通念も介在している。一方で、英語圏の諸国では、本国人、外国人を問わず、日本文学や日本史、日本語学の研究論文を英語で執筆し、発表することはむしろ主流である。すなわち、「言語の値段」および「学術研究の主体」をめぐる、帝国主義的・植民地主義的ヒエラルキー構造が形作られてしまっている。

私はけっして、台湾の研究者が日本語で日本研究の学術論文を書くことを批判しているわけではないし、すべての在台日本人研究者が中国語や台湾語をマスターすべきだ、さもないと植民地主義だ、といたいわけではない。だが、日本側の日本文学や日本史、日本語学の研究者達は、かつて日本の植民統治を受け、現在でも国家規模の格差から日本と平等とはいえない関係にある台湾において、いかなる言語を用いて、誰に向かってどう語りかけるべきか、という問題をもうすこし真面目に議論すべきと思われる。すべての日本人研究者が中国語で書く必要はないが、矛盾を我が身で引き受けようとする人間を少しでも増やすことが、いま求められるべきなのでないだろうか。

これらについて、私はすでに別のところで論じたことがあるので、これ以上詳しく述べることはしない。ここで強調したいのは、私は台湾の日本語学科に勤務することによって初めて、これらの問題の存在を意識し、考察する機会を得たという点である。そうした意味において、私にとってこの職場は、学問・思想上のよき「学び」の場である。これまでの自身の研究になんらかの独創性があるとしたら、それは台湾の日本語学科での経験と切り離すことができない。

(笹沼俊暁 ささぬま としあき 東海大学日本語文化学系)